

教員としての力量形成過程の側面～自らの教育実践  
を振り返って～

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷川, 義治 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/5420">http://hdl.handle.net/10098/5420</a>

## I

## 教員としての力量形成過程の側面

～自らの教育実践を振り返って～

長谷川 義 治

力量形成というと、研修講座をイメージすることが多いと思われる。校内・校外研修講座は効率よく学ぶことができる機会として重要であるが、研修講座以外にも力量形成の場面はある。むしろ、日常の教育実践の中にこそ、力量形成の機会があるとも言える。

私の公立学校教員としての生活は34年間。目の前の生徒であったり、目の前の業務であったりの違いはあるが、その時々、自分としては、全力で取り組んできた積もりである。その34年を、初任期、充実期、中堅期、管理職期の4期に分け、その時々、の出来事を通して、生徒や先輩・同僚から学んだこと、自らの思いをまとめ、自らの教育実践を振り返ることにする。

これから教職を目指す若い学生たちが、力量形成の「種子」を感じ取って、何かの参考にしていただければ幸いである。(括弧内は所属、年齢と在職年数。)

## 1 初任期 一教員としての基礎形成(県立丹生高等学校、24～29歳、6年)

教員になって、最初の5年ほどの期間は、正に、期待と不安が入り混じっている状態であったが、担任や部活動顧問を経験する中で、それを自信の持てる状態に徐々に変えていくことができた。先輩教師に支えられながらも、じっくりと取り組むことができ、その後の教育生活の骨格が形成できた時期であったように思う。

### (1) 定時制勤務 一生徒の教員評価

昭和48年、私の最初の赴任校は、丹生高等学校。実際には、織田分校（夜間定時制）で、生徒数は約60人。既に閉校になっているが、当時としては小規模の定時制ながら、勤労生徒のための学校として、しっかりと機能していた。私は、定時制主事（現在の教頭）のお世話で、織田町（現越前町）内で下宿しており、時間的に余裕もあったので、学校にはいつも1番早く出勤し、教材の準備をするとともに、職員室の机の上を拭いたり、職員室・廊下のワックス掛けをしたり、冬には通学路の除雪をしたりするなど、環境整備にも心掛けた。生徒の中には、定時制が本務の教員と兼務の教員とで対応が違う者もいた。生徒は、自分にかかわる指導時間の長さを愛情の強さととらえて、教員を評価していることを学んだ。

### (2) 学級委員 一期待心が生徒を伸ばす

翌年は本校勤務になり、その後、5年間、担任と進路指導部。丸岡町（現坂井市）の自宅から片道40km以上の通勤であったが、道路の渋滞のことも考えて、早めの出勤に心掛け、学校に着くのは、いつも、1、2番目であった。

本校勤務になり、いきなり1年生の担任になった。何もかもが初めてのことで張り切っていたが、前期の学級委員を決める際に、前代未聞のことを行ってしまった。通常、1年生の前期だけは、生徒同士が余り知らないこともあって、学級委員を担任の方で指名する。その際、高校入試の成績を考慮して、成績上位者から割り当てていくことが多い。私は、事前に、学年主任からクラス生徒の成績順位を貰っていたが、なぜかそれを成績点数と思い違いし、結果的に、成績下位者から割り当ててしまった。クラスで学級委員の氏名を発表しても、おや？と感じた生徒もいたかも知れないと思うが、異論は出ずに、そのままのスタートとなった。ほどなく、周りの先生からの指摘で自分の思い違いに気付いたが、時既に遅かった。幸い、生徒たちは頑張って学級委員の役割を果たしてくれたし、その後も、着実な高校生活を過ごしてくれた。けがの功名ではあったが、教師がその生徒に期待し、活躍の場を与えることで、生徒は自らの能力を発揮してくれることを学んだ。

### (3) 野球部監督 一基礎・基本の徹底

部活動顧問として、わずか2年間であるが、野球部を担当し、1年目は部長を、2年目は監督を務めた。特に、監督になって心掛けたことは、「運動の基礎は足腰」と考え、その強化策としてランニングの練習時間を増やした。もちろん、自分も部員と一緒に走った。部員は、バッティング練習や守備練習をしたくて反発した時期もあったが、練習試合でその成果が出てくると反発も自然となくなった。また、「部活動は教育の一環」ということを徹底した。部員には、こつこつ努力している者は、たとえ非力な面があったとしても、必ず先発で使うことや、練習を無断で欠席する者がいたら、連帯責任ということで、全員のランニング距離を増やすことなどを約束し、実行した。チーム内の連帯意識が強くなり、

秋季県大会では、2回戦で9回2死ランナーなしからの逆転負けで、悔しい思いをしたが、その相手校はベスト4まで進んでおり、相応の手応えを感じることができた。

#### (4) 進学クラスの担任 ーできる生徒・できない生徒

本校勤務2年目の終りに、M校長から、次年度1年生の進学クラス担任を打診された。2年生の担任をしており、その学年を持ち上げて卒業させたいという気持ちがあったし、一方、野球部の指導に手ごたえも感じていた。確かに、野球部監督は、ほとんどの日曜日が練習試合で埋まって、身体的にもかなりハードであった。そのような状況で進学クラスの担任という重要な役割を担うのは、虻蜂取らずになりかねないと考え、校長に「野球か進学クラスかのどちらか一つに」と返答したところ、「野球部監督は探すから、進学クラス担任を」と言われた。また、そのころ、体育教師のY先生から、「自分はホッケー部の監督ではない。保健体育科の教員である。」との話を聞いた。全国レベルのホッケー部指導者から、教師として立つ位置の話を聞いて、自分の場合は、数学の教科指導であり、進路指導等であると考えてもいた。結局、進学クラス担任を引き受けることにした。

野球部監督を外してもらったので、進学クラスの学級経営に専念できた。共通1次試験が導入される最初の学年ということもあり、また、自分自身が高校時代に周辺校の進学クラスで育ててもらい、その恩返しをする機会と考えて、朝補習の実施や家庭学習の習慣化など、独自の工夫を試みながら学級経営に当たった。生徒は、県模擬試験の県順位1,000番以内に約20人が入るほどの頑張りを示してくれた。教員は、しばしば「できる生徒・できない生徒」と表現することがあるが、当然のことながら、生徒の成績は固定的でない。例えば、高等学校卒業段階の「できる・できない」は、中学校卒業段階の「できる・できない」との相関はそんなに高くなくて、むしろ、高等学校3年間の努力・頑張りとの相関はかなり高いことを感覚的に知っている。生徒一人一人は、その能力を開花させる場所・時期が異なるだけで、教師にとっては、生徒の能力をいかに引き出し、いかに伸ばすかが最も重要である。生徒たちの頑張りから、そのようなことを学んだ。

## 2 充実期 ー実践メンバーとして活躍（県立高志高等学校、30～38歳、9年）

転任した翌年には、藤島・高志学校群選抜制度が導入され、学校の目標は、「藤島に追い付け、追い越せ」とはっきりしており、学校全体に活気がみなぎっていた。教員間で十分に議論し、共通理解の下で指導に当たり、その成果も確実に上がってきた。私たち若手教員は、実践メンバーとしてかわることができ、とても充実していた時期であったと思う。

### (1) 理数科担任 ー生徒に負けた

昭和54年に高志高等学校に転任し、いきなり理数科の担任。当時の高志高等学校理数科

は、学校群導入前で、藤島高等学校普通科に次いで人気の高い学科であり、実際に意欲の高い生徒が多かった。担任はもちろん、国語、数学、英語の教科担任も異動がない限り3年間持ち上りの体制をとっていて、じっくりと指導できる環境にあった。とてもユニークな生徒が多く、中には、当時、流行していたルービック・キューブの6面を簡単にそろえるだけでなく、それを自分で作成する者もいた。普通科の生徒からは羨望のまなざしで見られていた。

特に、私が3年生の微積分を教えていた時であったが、数学教師として「生徒に負けた」と思った出来事があったので少し詳しく説明する。それは、極大・極小の定義に関することである。微分可能な関数  $f(x)$  において、 $x=a$  で極小になることと、 $x$  の値が増加するとともに  $f'(x)$  の符号が  $x=a$  において負から正に変わることは同値かということである。恥ずかしい話であるが、私は、それまで同様、それを同値であると思い込んで指導したが、授業中、T君が疑義をはさんだ。そして、翌日、T君は、 $x=0$  の近傍で激しく振動する関数を具体的に作って持ってきた。改めて、いろいろ調べてみたところ、東京医科歯科大学の昭和55年度入試問題に、正に、T君が作ったような関数  $f(0)=0$ 、 $f(x)=2x^2+x^2\cos(1/x)$  ( $x \neq 0$ ) が出題されていた。極大・極小の定義については、数学ⅡB及び数学Ⅲの教科書で、2回出てくるが、その本当の意味を全く理解できずに、単に、整関数と一般の関数の違いだろうとやり過ごしていた、自分の間違いに気付かされた。

## (2) 学校群導入と学年体制づくり —H校長の学校経営

昭和55年に藤島・高志学校群選抜入試制度が導入。新制度入学生が全3学年そろった、昭和57年に就任したH校長は、着任早々、中庭をアスファルト舗装して、生徒がスリッパのまま出て、思い切って発散できるように「活力の広場」を開設したり、勉強と部活動の両立には、部活動を短時間集中型に変えることが必要と「下校チャイム」を導入したりするなど、積極的な学校改革を推進した。また、校長自身も他県の伝統校を訪問する中で、緑に囲まれ、落ち着いた雰囲気の中で教育すべきとの思いを強く持っておられ、実現には至らなかったが、学校の正門一帯を緑の木々で囲み、落ち着いた学習環境を醸し出そうという「グリーンベルト構想」を描いて見せた。様々な改革を推進したことに対して、一部の保護者から、「改革は急激過ぎると反乱である」と言われた時期もあったが、特に、進路指導については、学校群制度導入の趣旨を踏まえ、藤島高等学校に引けを取らない成果を上げるべく、その充実を目指した。教員には、富山県や石川県など近県の進学校を視察させ、それまでの、校務分掌や教科が主導の体制から、学年会が主導の体制へと改革し、学年会の主体的な判断・責任で様々な手立てが講じられるようになって、学校全体に機動力が生まれてきた。例えば、数学の教科担任の持ち方であるが、前任校でもそうであったが、いわゆる「縦持ち」で、3学年にわたって、各1クラスずつを担当する。教師としては、全学年を担当するので、高等学校における教科指導の全体像や指導の流れは把握しやすいが、一方、数学の遅れやつまずきが目立つ学年があっても、学年担当者としての責任感が

どうしても弱くなる。ところが、視察した学校では、いわゆる「横持ち」を実施しており、担当学年を割り当て、当該学年については複数クラスを担当している。当然、3学年すべてを担当することはできなくて、指導の流れを把握するには難点があるが、学年を担当している教員数は少なくなり、その分、責任感も強くなる。生徒のつまずきには、学年会での協議を踏まえて、数学科の学年担当者が全クラスの生徒対象で放課後に補習を実施し、保健体育科の担任が部活動顧問との調整を担うなど、円滑な協力体制が築かれるようになった。様々な改革の成果も徐々に表れて、進学実績は著しく上がっていった。

### (3) テニス部顧問 ー顧問の指導力

部活動顧問については、2年目から8年間、女子テニス部を担当することになった。私は、学生時代に野球の経験はあったが、テニスの経験は全くない。しばらくテニス教室に通ってテニスの初歩を習い、時間を見付けては、部活動に顔を出すように心掛けたものの、技術的・戦略的な指導については全くの素人で、大会成績はなかなか上がらない。昭和61年に、中学校でのテニス経験者2人が入部してきた。彼女たちは1年生ながら積極的に部活動をリードしてくれた。彼女たちは、2年生になった夏休みに、仁愛女子高等学校テニス部の練習に参加させてほしいと申し出てきた。前例はなかったけれども、早速、仁愛女子高等学校顧問のT先生に依頼したところ、快く引き受けていただけたので、生徒を練習場まで送迎する。しかし、さすがに全国トップレベルの学校の練習とあって、生徒は簡単には付いていけない。それでも、何回か参加させてもらう中で、練習メニューの濃度の高さを感じ取り、自校に戻っての練習にそれを生かしてくれた。私は、彼女たちが3年生になる前に異動してしまったが、そのうちの1人は、翌年の春季総合体育大会シングルスで、4回戦・準決勝戦で仁愛女子高等学校の選手に勝利し、決勝戦では仁愛女子高等学校の選手に勝てなかったものの、見事に準優勝し、インターハイに出場することができた。彼女たちの向上心の強さもさることながら、県全体のテニス競技力の向上を思って指導して下さったT先生の度量の広さに感服した。そして、彼女たちが練習参加を申し出てくれたおかげで、素人顧問であっても、生徒たちの意欲を受け止める心があれば、それを育てる道は開けることを学ぶことができた。

### 3 中堅期 ー振り返りと学校支援 (県教育研究所・県教育庁、39～50歳、12年)

それまでの教員生活を振り返ることで、特に、数学教育の在り方を学び直す機会を得るとともに、教育行政を経験することで、学校現場を支援する、いわゆる裏方組織の存在意義・重要性を体感することができた。さらに、小中学校勤務の教員や行政の職員等との出会いで人的ネットワークを広げることができ、私自身にとって大きな財産を得た時期であったと思う。

(1) 学力調査 一観点別評価

昭和 63 年、教育研究所に転勤して、最初の仕事は、学力調査問題の配送であった。この調査は、昭和 20 年代から毎年、小学校 6 年生と中学校 3 年生を対象に実施していて、全国的にも珍しいものである。第 37 次の学力調査は 4 月に実施され、抽出学級の答案が教育研究所に戻ってくる。その答案を採点し、平均点等の結果をまとめ、速報として 1 学期中に、さらに、結果を詳細に分析・考察し、指導法の改善を提言する形でまとめ、報告書として 2 学期中に各小中学校に配布することになっている。高等学校しか勤務経験のない私にとっては、学力調査も到達度評価法も初めてのことで、とまどいばかりであった。特に、観点別評価はある程度理解できるものの、問題作成となると、相対評価に慣れている者にはなかなか難しく、前次までの報告書を読んだり、橋本重治の「到達度評価の研究」を調べたりして、評価問題の作成、結果の分析・考察を進めていった。そして、2 年目には、第 38 次学力調査の主担当を務め、問題作成の段階から報告書作成までの全過程を通して中心にかかわった。

(2) 数学的な考え方 一さすが数学の先生！

私は、数学科教員として、それまでの 15 年間、数学的な考え方とは、既習の事項を踏まえながら、論理的に推論することであると漠然と思って指導してきた。ところが、教育研究所の S 先生から「さすが数学の先生！」と言われるような出来事があり、期せずして、数学的な考え方について深く学ぶという貴重な機会を得た。私の教員生活において、大きな転機の一つとなったので、少しだけ説明することにする。

S 先生から渡された紙には、図 1 のようなマス目に数字が書かれていて、問題の趣旨は、

- ①同じ数同士を、マス目を通過する線で結ぶこと。
- ②その線同士は決して交わらないこと。
- ③線は、どのマス目も必ず通ること。

であった。

試行錯誤しながらも解けたので、翌日、答えを持って行くと、S 先生曰く、

「実は、子供の担任からの年賀状にこの問題があって、正月の間、家族みんなで考えたが解けなかった。さすが数学の先生！」

そう言われた時、私の頭の中には、「なぜ、自分は解けたのか。」「数学科教員の思考は他の人とどこが違うのか。」という疑問が浮かんだ。

そこで、自分自身が試行錯誤した過程を振り返ってみると、それが数学的な思考であるとなれば、それは、決して、演繹的な考え方だけではないことに気付いた。後で分かったことであるが、帰納的な考え方、類推的な考え方、単純化の考え方などを使っていたので

									3
					2				
		5						1	
					6	4			
1									
			3				2		
	4								
	6							5	

図 1

あった。そして、G.Polya（柿内賢信訳）の「いかにして問題をとくか」や片桐重男の「数学的な考え方の具体化」「問題解決の過程と発問」などを学ぶ中で、数学の授業を通して、一つの数学的事実に関する「知識」「技能」よりも、「数学的な考え方」「関心・意欲」を育てることが重要であることが、自分なりに明確に理解できた。

### (3) 研修講座の講師探し ー教育者の心意気

研修講座の計画に当たって、H所長から、最低1コマは所員が担当するようにと言われていた。その条件は何とかなっても、講座全体の中核となる部分の講師、それも受講者にとって魅力のある講師を決めるのには、かなり苦勞した。教育研究所の予算は限られており、著名な講師はなかなか依頼できない。そこで、日本数学教育学会の大学入試懇談会や全国研究大会などに積極的に参加して、目ぼしい先生と名刺交換などをして、後日、電話で依頼する作戦をとった。謝金が少なくて婉曲的に断られるときもある中で、当時、受験指導でも有名であった、早稲田大学教授の寺田文行氏に依頼したときは、「研修講座の講師を務めるのは自分たちの仕事。研究所にお金がないことは分かっている。自分の研究費で補助の人も連れて行く。」とお願いいただき、とても感激した。数学教育に携わる者の心意気を教えられた思いがした。

### (4) H所長との出会い ー生涯現役

H所長は、県教育庁教職員課長や小学校長を歴任された後に所長に就かれた方で、国語教育の実践家としても有名である。教育者として高い識見を持っておられ、いつも、熱く教育を語っておられたのが印象的である。中学校数学の現状を全く知らない私が、中学校数学講座を担当することになり、その不安をH所長に相談したところ、直ぐに、中学校教育研究会数学部会長に電話し、数学の授業参観を手配して下さって、優れた指導を実践される先生の授業をいくつも見せてもらうことができ、大変助かったことがあった。また、学力調査の報告書についての所長ヒアリングでは、平均点や観点別達成度の状況、さらには、指導法の改善など、どの教科にも十分な時間をかけて真剣に吟味し、そのために長時間いすに座っていることになり、「学調あせも」ができたくらいであった。H所長は、人間的な幅があって温かさがあり、しかも仕事に徹する姿勢は厳しく、定年退職を迎える年齢になっても、常に、教育のことが頭の中を占めているようで、例えば、100m走のランナーが120mほどを全力で走り抜く、そのようなことを連想させる管理職であった。なお、H所長は、退職後15年以上経過した現在も、国語教育の実践研究を継続されておられる。

### (5) 指導主事の役割 ー教員の応援団

平成2年に県教育庁指導課の指導主事になり、その後、10年間、教育庁に勤務して、平成12年には、高校教育課長を務めた。教育庁に長く連続して勤務する者は、最近は少ないが、当時は何人もいた。教育庁に勤務するようになって、予算のことや議会対応、マスコ

ミ対応など、いわば学校教育を支えている部分に携わることになった。さらに、法律や規則の根拠を確認する機会も多くなった。

新任者の課内研修で、課長などから、福井県の学校教育の現状や指導主事としての心得等についての説明を受ける。特に、学校訪問や研究会での指導・助言することが多くなるが、その際の心構えとして、褒める点と改善すべき点の両方を見るということであった。実際に何度も学校訪問などを経験する中で、改善すべき点はすぐに見付けられるが、褒める点を見付けるのは意識しないと難しいことが分かってきた。1度だけ失敗もした。北陸4県数学教育研究会で、ある発表者が、数学のドリル演習の取組を大きな成果として発表したことに対して、私は批判を先に、しかもたくさんしてしまったので、発表者が激怒してしまうということがあった。冷静に考えてみると、指導主事が生徒を直接に指導するわけではない。生徒を日々指導している先生方が意欲を持って指導に当たれるように、指導・助言したり、情報提供したりすることが指導主事の重要な役割であると理解し、以後、教員の応援団に徹することを心掛けた。

#### (6) 責任感 ー赤ペンを入れる

課員は、様々な業務を担当しており、起案やあいさつ原稿などを書くことが多いが、課長までの決裁、あるいは教育長や知事までの決済をもらう過程で、ほとんどの場合、赤ペン（修正）が入る。決済システムは、意思決定の際の責任範囲を明確にする手続きであるとともに、内容等を文章表現したときに、何人もの目を通して、間違っていないか、専門的になり過ぎていないかなど、内容・表記等をチェックする手続きでもある。

私が進路指導を担当し、「進路のしおり」の作成をしているときのことであるが、印刷業者から初校が出来上がってきたので、各指導主事に校正をしてもらい、それを印刷業者に渡した。ところが、その中に、原文を大幅に修正したものが混じっていた。印刷業者からは、「これは校正と言わない。原稿の書き直しである。1字いくらで追加料金をもらわないと採算が合わない。」と言われ、担当者として数千円を支払って納めてもらった。その後は、分担して執筆を頼んだ場合であっても、自分が全原稿を書く積もりでチェックするように心掛けた。仕事の厳しさ、仕事をするときの責任者の意味を教えられた出来事であった。

#### (7) スカラーズ・キャンプ ー未見の我を発見せよ

同じく、進路指導の担当をしているとき、県内の高校生同士が交流を深め、在り方生き方を考える機会を設けようということで、新規事業「スカラーズ・キャンプ」を企画した。県内の全高等学校から2人ずつが参加し、講義やディベートなどを内容とした2泊3日の宿泊研修である。講師には、当時の知事の栗田幸雄氏、日華化学(株)社長の江守幹男氏、東北大学総長の西澤潤一氏の3人をお願いした。特に、3人目の講師については、高校生に向かって夢を語ってもらえる科学者ということでリストアップし、何人かに交渉した後に、西澤総長に依頼してはどうかという話になった。東北大学に電話したところ、直接、西澤

総長とお話することができた。総長には、「高校生に話をするのは大学人の役目です。」とあっていただいて、学会出席の日程をやり繰りして、快く引き受けていただいた。当日は、高校生に向かって、独創することの大事さを話しされ、「未見の我を発見せよ」と熱く語っていただいた。

さらに、講義前の講師紹介や講義後の謝辞は、すべて、生徒が行うようにした。特に、謝辞については、講義内容を十分に聞いて、その感想も織り交ぜてお礼を述べるわけで、かなり大変と思っていたが、どの生徒もしっかりとその役割をこなしてくれた。

超一流の科学者が、「自分の役目」と言われた純粹さに感動し、教員が高校生の可能性を信じることの意味も教えられた。

#### 4 管理職期 —学校経営と危機管理

(県教育庁・県教育研究所・県立清水養護学校・県立藤島高等学校、51～57歳、7年)

管理職には、現状を的確に把握し、課題を明らかにして、具体的な対応策・方針を示すことが求められる。そのためには、所属職員とのコミュニケーションに時間を掛けるように努めた。特に、危機管理の観点からは、管理職だけではどうにも対応できないことが多い。その意味でも、職員の意欲を伸ばすことを常に心掛けた。

##### (1) 県立学校パワーアップ事業 —地域のセンター的機能の強化

平成13年、久しぶりに学校勤務に戻った。福井県心身障害者コロニー「若越ひかりの村」に入所している児童生徒のために設置された知的養護学校であるが、重複障害の子どもも多く、また、近隣地域からの通学者もいた。さらに、同じ校舎内に、県立福井南養護学校清水分教室(高等部)も併置されている。分教室の教員も含めて、教職員数は50人余りで、こぢんまりとした、アットホームな雰囲気の学校である。

ちょうどその年に、県教育委員会の新規事業「県立学校パワーアップ事業」がスタートし、各学校が独自に事業を計画し、実施できるようになった。そこで、清水養護学校としては、「障害児のライフステージを支える地域ネットワークづくり」をテーマに掲げ、特に、学校全体の協力体制を図りながら教育相談機能を高めることで、地域の幼稚園や小中学校との連携を強化するなど、養護学校としてのセンター的役割を果たすことを目指した。一人の児童生徒の指導の在り方を全員で真剣に議論するという、清水養護学校の良き伝統は、学校を取り巻く様々な情報を共有することから生まれ、学校経営に対する教職員の参画意識につながっていることに気付いた。

##### (2) 教頭の役割 —校長を助けるとは

私自身、初めての校長職であり、初めての養護学校ということで、とまどいは少なからずあった。また、校長、教頭、事務長の3人が同時に新しくなるということで、教職員に

も不安感はあったと思われる。T教頭は、新任教頭であるが、前任校が県立福井南養護学校で、特殊教育についての造詣も深かった。年齢的には私よりも先輩であるが、特に、児童生徒や教職員に関する情報の共有ということについて、教頭として校長をよく助けてもらった。様々な場面で、校長が判断しやすいように、必要な情報を収集し、課題を整理して説明してもらった。また、教頭は、「職員室の担任」とも言われるとおり、教職員や児童生徒の動向は校長よりも把握しやすい。例えば、土・日曜日にボランティア活動で頑張った教職員がいると、教頭はそれを校長に知らせてくれ、おかげで、私は、ねぎらいの言葉を掛けることができた。私の方も、学校経営に関する重要な案件であっても、教頭や事務長とは腹藏なく話し合い、意見を出し合いながら、校長として判断するように心掛け、教職員とも良好な人間関係を維持することができた。

### (3) 県教育研究所副所長 一 所員合唱の指揮

平成15年に教育研究所に転任した。12年振り2回目の勤務で、しかも、今回は副所長。所内の組織体制は、表現教育課がなくなったり、総務課が管理室に変わったりしており、また、業務も、初任者研修や5年経験者研修、10年経験者研修など、研修関係のものが大幅に増えていて、所員は一生懸命に仕事をしているが、何となく余裕がなく、所員同士の交流が十分でない。所員の前任校も、小中学校、高等学校と様々であり、また、所員がそれぞれに秀でた専門領域を持っていることは前回と変わらないが、お互いの良さを吸収し合う場面が減っているように感じた。教育研究所での出会いは、新しい人的ネットワークづくりのチャンスでもあり、今後、教員生活を続けていく上で、大きな財産になり得る。副所長として、率先垂範が必要と考え、時間を見付けては、各課の小部屋に出向き、所員とのコミュニケーションを心掛けた。所員の中にも少しずつ広まっていったのか、年末の忘年会ではあるが、余興で所員合唱をすることが決まり、昼食休憩時を利用して何度もなく練習に取り組んだ。練習での指揮は、音楽担当のO先生がされたが、本番での指揮は、私に役目が当たった。私は、音楽の素養が全くなかったが、所員合唱をしようと発案した気持ちを大事にし、O先生から指揮の特訓も受けた。当日の所員合唱はとても好評で、合唱を終えた後の満足気な顔が印象的であった。

### (4) 学校経営 一 生徒を育てるのはだれか

学区・学校群選抜制度が廃止され、新入試制度がスタートした平成16年、藤島高等学校の校長に転任した。150年近い歴史を有する伝統校で、毎年、国公立大学に現役の約65%が合格しているが、学校群選抜の中で、例えば、難関大学への進学者数は必ずしも十分ではなかった。職員室はいつも慌ただしく、アットホームな雰囲気は余り感じられない。教職員数が多いという理由だけではなさそうに思えた。例えば、全学年30人の担任を見ると、いわゆる5教科の教員だけであったり、第3学年の担任が男性教員だけであったりするなど、教師個人の力量の高さで指導していて、教師集団の力量となるとやや不安な面を感じ

た。体育教師からは「理想と現実が違う。保護者が不安がる。」とも聞いたが、そのような心配は全くの無用で、生徒に理想を教えることが教師の本来の役目であるし、担任の役割は学級経営であって、教科を教えることではない。数学を数学教師がしっかり教えればよい。特に、「文武不岐」を掲げている学校として、勉学と部活動の両立を指導する上で、体育教師の役割は重要であると考え、翌年からは、体育教師にも担任を割り当てた。保護者から不満の声はなかったし、あったとしても、「生徒を全教職員で育てている。」と説明すれば理解してもらえることと考えて行った。

#### (5) SSH 研究指定 一部分と全体のバランス

スーパーサイエンスハイスクール（以下、「SSH」とする。）事業は、将来の国際的な科学技術系人材の育成のための取組の推進を目指して、平成 14 年度から文部科学省が始めた事業で、藤島高等学校は、平成 16 年度に 3 か年の SSH の研究指定を受けた。それまでは理数科設置校が中心に指定を受けていたが、普通科が受けたところに意義があった。すなわち、文系生徒も含めて、科学技術に関する興味・関心や知的探究心を高めることが求められ、学校設定科目、講演会、高大連携特別講座、エクスカッションなどの柱を設けて、研究を進めることにした。

理科教師の多くは、生徒に理科実験の醍醐味を体験させたいと思いつながら、教科の単位数が限られている中で、示範実験でしのいでいるのが現状であるが、教員の中には、大学受験への対応の方を心配している者が多く、研究指定を受けたこと自体を批判的に思っている者もいた。教員は、生徒が入試問題を解けるようにと、様々な解答パターンを教え込みがちであるが、生徒の意欲を育てる意識がやや弱い。生徒の興味・関心や知的探究心を育てることは、理科教育にとどまらず、学校教育全般の課題である。受験対応は部分であり、知的探究心は全体であって、そのバランスを誤らないことが重要であると考え、職員会議や 1 年学年会などで、SSH 研究事業の趣旨と取組方針を繰り返し説明し、全教職員の共通理解を図ったり、季刊誌を発行したりすることで、研究事業の進捗状況を発信し、保護者も含めて、理解・協力を得られるよう心掛けた。

#### (6) 校長講話 ー校長は講話で勝負する？

校長は、学校行事の中で、直接、生徒に講話をしたり、発行物の巻頭言などの原稿を書いたりすることが多く、「校長は講話で勝負する」と言われる。しかし、自分が生徒の時の経験から考えてみても、校長の講話が生徒の記憶に残ることはほとんど期待できない。「校長は、朝礼の講話作成に時間をかけるべきでない。」との一文を見つけた時は、ほっとしたことを覚えている。そうは言っても、私自身が、話をしたり、文を書いたりすることが苦手なこともあって、自分なりに時間をかけた。教室やグラウンド・体育館での生徒の活動の様子を見て回ったり、新聞や本を読んだりして、生徒の頑張りや気に入った表現を見付けると、それを書き留めておいて、話のネタにする。そして、「～はするな。」という否定

的な表現を避け、「～をしてほしい。」という肯定的な表現をすることを心掛けた。生徒が問題行動を起こした場合でも、生徒の人格を否定せずに、生徒の行為が周囲の人に悲しい思いをさせたことに気付かせ、改めるよう期待を込めて話すようにした。

なお、講話をするとき、私の心構えは、生徒に向けた形式をとってはいるが、実は、教職員に向けた部分がかかなり多い。校長の思いを踏まえながら、実際に生徒を指導するのは、教職員だからである。

#### (7) 生徒会誌の回収・再発行 ー管理職の危機管理①

藤島高等学校では、毎年、卒業に際して生徒会誌を発行している。平成16年度生徒会誌の学級紹介の中で、人権の観点から不適切な表現をそのままに掲載してしまった。本人・保護者から担任に指摘があり、直ぐに家庭訪問して、管理職や生徒指導主任、担任が謝罪した。人権の観点から不適切な表現は指摘箇所だけでなく、何か所もあったので、回収・再発行することで、本人・保護者の了解を得た。臨時職員会議で経緯を説明し、高校教育課に1報を入れた。併せて、PTA会長や同窓会長にも口頭説明して、お詫びした。生徒会誌を回収して、4月末ごろ、修正したものを改めて発送した。ところが、一連の作業を終えた矢先に、あるマスコミが、この件を取り上げて報道した。私たちも驚いたが、保護者からも「やっと落ち着いたのに、なぜ今になって出すのか。」と苦情の電話があった。県教育委員会や県人権擁護委員会の調査があり、発行前のチェック体制については反省すべき点が多かったが、発行後の対応について、人権的な問題は指摘されなかった。

この件があって、生徒指導部の教員の一部には、生徒会誌の発行を取りやめようという話さえあったが、大事なことは、生徒たちにつらい思いをさせないために、だれが責任感を持って業務を進めるかを見直すことだと説得した。この件を通して、校長としての責任の重大さを改めて学び、特に、正確な状況の把握、謝罪の仕方、報告・説明の在り方、マスコミの対応など、適切かつ迅速な対応が大事であることを学んだ。

#### (8) 学校群廃止後の経営構想 ー新藤島の目指すもの

平成16年に新入試制度の1期生が入学してきた。学校群選抜時代と違って、藤島高等学校への入学希望を明確に持っている生徒が入学してくるようになったが、校長として一つだけ気を付けたことがある。それは、2・3年生への配慮である。マスコミ関係者をはじめとして、周囲の者は、学校群選抜制度の生徒と新制度の生徒を何かと比較してとらえようとする。生徒の立場に立つと、入試制度の変更は、自分ではいかんともし難いことである。昭和55年の学校群制度導入時に、「純藤・群藤」などという言葉が生まれ、心を痛めた生徒が少なからずいたと聞いていた。私は、同じことを繰り返してはならないと肝に銘じ、教職員にも禁句とし、制度がどうあれ、目の前にいる生徒の進路実現に全力で取り組むよう徹底した。

平成18年度には、新制度入学生が全学年そろそろ。校内の教員から、体育や芸術、家庭の単位数が増やす必要があるとの声もあり、自分なりに構想を描いていた。一例をあげる

と、50分授業を60分授業にすることである。藤島高等学校では、毎日、50分×7コマの計350分の授業を実施しており、授業間の休憩10分×6回との合計は410分。それを、60分×6コマの計360分の授業と休憩10分×5回で合計が410分で全く同じになり、しかも授業時間は、1日10分多い。年間授業日は約200日であるから、年間にすると40単位時間増えることになる。そこで、「部活動の日」の設定も可能である。その日は授業を5コマにするのである。また一方、SSH研究の成果の一つとして、理系生徒たちを見ると、理科3科目履修の素地は十分にある。理科3科目履修させるような教育課程の編成も可能で、そうなれば、医学系志望の生徒の受け皿として、学校の特色化も図れるのである。

そこで、平成17年度後半には、プロジェクトを立ち上げ、具体的には、1単位時間の弾力化、2学期制の導入、Bクラス存続の是非など検討し、新藤島が目指す学校像を描くことにした。プロジェクトのメンバーを選定し、先進校の視察も実施し、それも参考にしながら内部検討を重ねてもらい、年度末には、職員会議で検討の中間状況を報告して、全教職員からも意見をもらった。検討途中での異動になったので、後任の校長に引き継ぐことになった。

#### (9) 未履修問題 —管理職の危機管理②

平成18年、県教育庁高校教育課長として転任になる。その年の秋、富山県の県立高等学校に端を発した未履修問題は、またたくまに全国に広がり、本県でも、県立11校、私立6校で必履修科目の未履修があった。高等学校学習指導要領には、必履修教科・科目を規定していて、平成元年改訂（平成6年実施）から、地理歴史科の「世界史」が必履修科目になっていた。もちろん、どの学校も、全員が履修するような教育課程案を県教育委員会に提出している。法令順守の精神に甘さがあったと言わざるを得ない。なお、学校週5日制の導入など「ゆとり教育」が進められ、生徒の学力低下が問題視される中で、高等学校として、大学入試への対策でしわ寄せを受けていた面があったことは否めない。

県教育委員会としては、未履修の状況を迅速に把握し、3年生への補講など当面の対応策を講じるとともに、次年度の教育課程案についてヒアリングを実施し、再発防止を図った。記者発表は何回も行われ、その都度、私は、担当課長の一人として対応することが多かった。記者からの最も厳しい質問は、「教育委員会は黙認していたのか。」であった。藤島高等学校で未履修があることを、前校長として知っていても、課長として知っているのとは区別すべきことと考えていたが、記者の質問に対する返答に窮した表情を映像に撮られるなど、相当につらい思いもした。ただし、私にも、藤島高等学校の校長のときに、教育課程を見直し、学習指導要領に従って「世界史」を履修できるように、3学年での履修を2学年での履修に変更してきたという自負心があり、そのことを理解している記者もいることが心の支えになっていた。

**参考文献等**

- ① 「数学部会誌」、福井県高等学校教育研究会、1981
- ② 「数学部会誌」、福井県高等学校教育研究会、1988
- ③ G.ポリア（柿内賢信訳）、「いかにして問題をとくか」、丸善、1988
- ④ 片桐重男、「数学的な考え方の具現化」、明治図書、1988
- ⑤ 片桐重男、「問題解決の過程と発問」、明治図書、1988
- ⑥ 橋本重治、「到達度評価の研究」、文化出版、1981